



子どもたちの心に平和の砦を

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から始まった戦争が長期化しています。皆さんも連日報道される現地の悲惨な情報や映像に心を痛めていることでしょう。子どもを含む多くの人々の尊い命が奪われ、日常生活が破壊され、さらに危険な状態にあることに、深い悲しみと怒り、恐怖を覚えます。一日も早く戦争が終結し、ウクライナに平和な日々が戻ることを祈るばかりです。

そのような中、不安や恐れ、無力感やストレスなどを抱えている子どもも少なくありません。

日本ユニセフ協会が、不安などを感じるの「自然なこと」として、否定せず最後まで聞くように配慮し、子どもとの対話を呼びかけています。

戦争もいじめも、暴力によって人の現在と未来を壊してしまうものです。国際的な平和機関であるUNESCO（ユネスコ）の憲章（前文）には次のように書かれています。

◆子どもとの対話のヒント◆

- ・子どもが何を知っていて、どう感じているかを知りましょう
- ・落ち着いて、年齢に応じた対応をしましょう
- ・偏見や差別ではなく、思いやりを広げましょう
- ・支え合う行動に注目しましょう
- ・会話を終える時は丁寧にしましょう
- ・見守り続けましょう
- ・ニュースに触れすぎていませんか？
など（日本ユニセフ協会HP参照）



戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心に平和の砦を築かなければならない。

お互いが知り合い、認め合い、正しいことを学ぶことによって平和は築かれていくのです。戦争もいじめも差別も、すべて人の心から始まります。どんな理由があっても「戦争はいけない」ということ、たとえ小さな子どもでも、友だちとの「争いごとを力によって解決しない」ということを真剣に伝えていかねばなりません。

さらに、子どもとの対話を進め、国際情勢や政治のあり方など、深い学びにつなげたり、自分たちにできることを考えてみたりして、子どもの心の中に平和の砦をしっかりと築いていきましょう。そのことがきつといじめ防止にもつながると信じています。



平和や反戦運動のシンボル「ピースマーク」

ドラマからいじめについて考える

最近、いじめに関する問題を提起し、注目されたテレビドラマを2つ紹介します。

1つは、昨年放送された、NHK総合ドラマの「ひきこもり先生」です。長い間ひきこもり生活を経験した主人公・上嶋陽平が、ひよんなことから公立中学校の非常勤講師となり、不登校を支援する教室を受け持つこととなります。

そこで様々な課題を抱える生徒たちと向き合いながら、一緒になって奮闘します。その第3話が「いじめの法則」というタイトルで、いじめの実態や課題が描かれています。

【第3話のあらすじ】



この中学校には、あちこちでいじめがあり、友達からのメールに返信するタイミングを失っただけで、いじめの標的にされている生徒もいます。

いじめグループからいじめを受けている和斗は、いじめの実行役もさせられ、学校に来てても花壇の世話をすることで自分の心を守っていました。ある時、そのグループから指示をされ、恐怖心もあり指示通り友達の奈々に変なメッセージを送ってしまいます。そのせいで奈々は学校に来れなくなります。

陽平先生のサポートもあり、和斗と奈々は和解するのですが、今度は、和斗がトイレで水を浴びせられ、さらに和斗の花壇が何者かに荒らされ、教科書をばらまかれるのです。その後、先生たちが校長室に集まって、話し合いがもたれるというのですが・・・！？

このドラマが語る「いじめの法則」とは、いったいどんなことを指しているのでしょうか。ストーリーからは、①いじめは、誰かが止めなければ、対象を変えながら続いていく、②いじめの背後には、教室内の心理的な序列や圧力が存在する、③まわりは、集団から孤立することや、次のいじめ標的になることを恐れて沈黙してしまうといったことが考えられます。いじめは、個人間のレベルにとどまらず、集団の構造的なものなのです。

また、スマホやSNSを介したいじめが一層深刻化、陰湿化していくという状況も“今日的な法則”を示しているのかもしれない。それでは、これらの「いじめの法則」にはまらないためには、どうすればよいのでしょうか。



いじめが起こりにくい集団や教室の条件として、① 安全な「場所」と安心できる「人」があります。自分の言うことを受け止めてもらえる、失敗しても大丈夫と思えるから、びくびくせずに発言や行動ができるのです。さらに、② それぞれの違いや個性を認め合える「関係」や受け入れられる「人」というのがあります。自分の存在や自分らしさが否定される所では、“ひとりぼっち”で苦しい生活をしなければなりません。

もしも、特定の人への否定的な発言や攻撃的な行動があれば、さりげなくそれを打ち消したり、見方を変えたりするようなメッセージや態度を示してほしいと思います。

また、③ いつもと違った人との対話や異年齢の人たちとの交流の機会ができるだけ多くあることも大事な条件です。様々な人との出会いや関わりの中で、友達関係がもっと面白く、さらに豊かになっていくのです。

もう1つのドラマは、今年放送されたフジテレビ系列の「ミステリと言う勿れ」(田村由美さん原作の漫画のドラマ化)です。その第2話での主人公・久能 整のセリフが大きな反響を呼びました。



「僕は常々思っているんですが、どうしていじめられてる方が逃げなきゃならないんでしょう。欧米の一部では、いじめてる方が病んでると判断するそうです。いじめなきゃいられないほど病んでいる。だから隔離して、カウンセリングを受けさせて、癒すべきだと考える」、「でも日本は逆です。いじめられてる子をなんとかしようとする。でも逃げると学校にも行けなくなって、損ばかりすることになる。(中略) 病んでたり、迷惑だったり、恥ずかしくて問題があるのはいじめてる方なのに」

この「いじめの方こそカウンセリングが必要」という考えに対して、多くの視聴者から賛同や共感の声が寄せられました。加害の子どもに対する個別の指導や心理的な援助は不可欠です。その際、被害の子どもを守り抜くことを前提として、場所や方法など、程度や状況に応じた有効な手立てが求められます。

大事なことは、いじめらしきものが起こった時、まだ小さいうちに事実関係や気持ちをできる限り正確に聞き取り、少しでも早い段階で対応することです。被害者の心情や加害者の課題に寄り添いながら、子どもたちの世界の再構築に努めていかねばなりません。



「第15回いじめ防止標語コンテスト」の入賞作品より

いじめの予防と早期発見・対応は、学校だけでなく、社会全体の重要な課題です。

毎年「いじめ防止標語コンテスト実行委員会」が、全国の複数のPTA協議会(兵庫県を含む)と共催で、「いじめ防止」をテーマとする標語を全国の小・中学生から募集しています。昨年度の全国と兵庫県関係の入賞作品を紹介します。



【文部科学大臣賞】(各全国賞から小・中各1点)

○小学生の部 (奈良県・小学5年生)

「『大きい』を1つ見つける前に『大好き』をいっぱい見つけよう。」

いじめを生まないために、一人一人の違いや良さを認め合い、お互いに尊重できる関係づくりの大切さについてあらためて気づかされます。

○中学生の部 (佐賀県・中学3年生)

「心にささった言葉の刃は 何歳になってもぬけることはない」

作者は、「ネットなどの誹謗中傷に苦しむ人のニュースや自分自身の経験を思いだして考えた。思いやりを持って言葉を選ぶきっかけになれば」と語っています。

【全国賞】(各PTA団体から小・中各1点、兵庫県分)

○小学生の部 (小学5年生)



「パパ、ママへ スマホ見ないで わたし見て わたしの『なやみ』に気付いてよ！」

○中学生の部 (中学1年生)

「コロナだけ? まん延防止は いじめにも」



この他にも、「(いじめ行為の)そばで笑い声」、「学校行くのがこわい」、「先生助けて!」など、苦しみや痛みをまわりの人々に切々と訴える作品もあります。

子どもたちが夢や希望を持ち、笑顔で学校生活を送れるように、ぜひとも家庭や地域で、大人と子どもが一緒になっていじめについて考える機会をつくりましょう。

あなたから始まる
いじめノー!
ストップいじめ!!



三木市子どもいじめ防止センター
電話: 0794-82-8110

相談日 月曜日～金曜日

ijime_boshicenter@city.miki.lg.jp

